

## 「俳句の形態について—桑原武夫「第二芸術」を読んで」

小学生の頃、祖母に俳句を習って以来句作を続けている。今は句会に参加し、新聞や大会などに応募しているため「俳句」について考えることが多い。桑原武夫は、フランス文学研究者である。その桑原が「第二芸術—現代俳句について—」という小論の中で、俳句論を展開している。本書評では、桑原の小論を概観し、その賛否を論じる。桑原は、現代では使われていないような漢字を用いているため、適宜漢字を直した。

桑原は冒頭で、自らの子供が学校で俳句を習い始め、鑑賞や句作について質問されたことが、この論を書くに至ったきっかけであると述べる。桑原は「現代の名家と思われる十人の俳人」の作品と「無名あるいは半無名の人々」の作品を合わせて 15 句を提示し、「名家」の俳句を選べるかと問いかける。桑原は「芸術品の価値を決定するものは、作品を通して作者の経験が鑑賞者のうちに再生産されるというのでなければ芸術の意味はない」として、俳句が示しているものが曖昧であること、鑑賞に特殊な技能が必要であることを指摘し、これが同好者だけの「特殊世界」を作り上げているとする。

また一句だけでは作者の技量を測りきれないことを指摘する。桑原はトルストイやロダン、志賀直哉などの作品は一作であったとしても技量を知ることができると思う。俳句は一句での作者評価ができないが故に「芸術家としての地位は芸術以外のところ」において決定されるものだとし、弟子の多さや主宰雑誌の発行部数、世間的勢力などに評価基準を置かざるを得ないことを指摘する。

さらに桑原は、俳句が誰にでも生産できるという点も指摘する。このような俳句のあり方は、人々に「自分たちにも楽にできる。ただ条件がよかったために俳句に身を入れたものが大家といわれているので、自分たちも芸術家になりえたはずだ。芸術はひまと器用さの問題だ」と思わせるが、「このように考えられるところに正しい芸術の尊重はあり得ず、また偉大な芸術は決して生まれない」と述べる。

桑原の俳句論は、俳句に少しでも触れたことのある人ならば誰もが思うことであろう。桑原の俳句批判は、①鑑賞の特殊性、②評価の特殊性、③創作容易性に分けることができる。以下ではこれら三点に注目して意見を述べてく。

①鑑賞の特殊性について。鑑賞が特殊であることは認めざるを得ない。しかしこの特殊性は俳句の特徴的な形態から来るものであると考えられる。俳句の基本的な規則として一般にも知られていることは「5・7・5」の 17 文字で作られること、作中に「季語」を入れることである。このような制限された中で俳人がさまざまなものを詠んでいるところを考えると、俳句の鑑賞には一定の技量が求められることは否定できない。しかし、この第一の批判が俳句の形態から派生するものであるところを見ると、形態に制限のない純文学畑の桑原の批判は、自らの基準を押し付けているに過ぎないことが分かる。

②評価の特殊性について。この点は第一の批判から派生する批判であると考えられる。つまり、俳句は特殊な形態を持っているため、一定の技量を持たないと評価が難しいとい

うことである。また、桑原は俳句が一句のみでは評価できないことも挙げている。この点に関しては認めざるを得ない。しかし、この批判は俳句に限られたことではない。例えば、プロボウラーがアマチュア選手と一ゲームで対戦すれば、負けることがあるだろう。ゲームもカラオケも、さまざまなことが少ない勝負において、アマチュアがプロに勝ることが想定可能である。純文学のように文字数が多い文学では、一定して技量を発揮し続けることが難しいため、プロとアマチュアの差が出やすい。俳句の特殊な形態においてこのような問題が生じるのは不可避であり、これは俳句が文学における芸術性を持たないという批判にはならない。少なくとも、俳句においては「無名」が評価されたならば、その人の（その句における）芸術性・技量を認めればよい。

③創作容易性について。この点は俳句の特徴、つまり一定の形態を持っているという点から生じる。桑原は創作容易性を問題視しているが、逆に俳句界への利点として解釈することも可能である。俳句は入門しやすいため、第二の批判のように「無名」が「名家」に勝る評価を得ることが可能である。そのため「名家」が名家であり続けるためには、日々の鍛錬が必要であり、良い句を作り出し続けることが求められるのである。この鍛錬は、俳句の技量の展開に繋がり、結果として俳句の芸術性は高まっていくと考えることが可能である。

桑原の批判は、純文学の視点を押し付けているに過ぎず、俳句の形態のオリジナリティの提示に収斂させることが可能である。俳句の芸術性はむしろ桑原の批判した形態にあるのである。俳句には「無季俳句」や「自由律俳句」などの新興俳句などがあるが、これらの芸術性については、別の機会に譲りたい。